

沖

11

2019

俳句雑誌【第36】



タウン誌

能村 研三

翔先生没後十年

林翔先生が亡くなられて今年で十年の歳月が経った。ご命日は十一月九日。同じ月の十一月二十一日が石田波郷の命日で今年が没後五十年となる。石田波郷を敬慕しておられた翔先生にとっては深い縁を感じる。

春駒を頷ち貧交十年まり 登四郎 先師登四郎が句集『咀嚼音』でこんな句を詠んでいるが、先師登四郎と翔先生の親交は「俳壇七不思議」の一つとも言われ実に七十年にも及んだ。登四郎と母ひろ子との生活が四十数年であったことからすればはるかに長い年月である。

「沖」が創刊された昭和四十五年には翔先生は五十六歳で、登四郎と共に「馬酔木」の同人であったが、登四郎が師の水原秋櫻子先生に「沖」の創刊のお許しを頂きに行くと秋櫻子先生は「編集は林翔さんをお願いするといよいよ」と言われたという話がある。秋櫻子先生も登四郎と翔の間柄や二人の性格をよく熟知していて正的確を得た助言をいただいたと思われる。

間もなく創刊五十年を迎える「沖」であるが、創刊の時の雑誌の基本レイアウトは翔先生がお作りになったもので、それを引き継ぎ現在に至っ

朽ち舟の陰の潮目に鯨を釣る
鯨釣の巧手と少し距離を置く
いつぼんの竹切るために身を細め

焦げ目よき土釜に炊けし茸飯

月今宵酒の合口よかりけり

開きぐせつきたるページちちろ鳴く

七曜を泳ぎきつたる芒原

浦安吟行

色なき風べかの名残りの湯屋二軒

ている。このレイアウトは「沖」創刊後いくつかの結社誌に真似されたが、このレイアウトは歴とした「翔ブランド」である。

翔先生は草創期の「沖」の編集長として次々と斬新な編集企画を打ち出され、「伝統と新しさ」を標榜する結社誌としての「沖」の盤石な基礎を作っていただけだと思う。

私も「沖」の編集長を務めた時代があったが、翔先生の東菅野のお宅の二階に有志が集まってこまかな編集作業をお手伝いしたことは大きな力となった。

二〇二〇年「沖」はいよいよ創刊五十周年となるが、名編集長林翔の名に恥じない「沖」を作っていかなければならないと思う。

能村 研三

稲光

森岡 正作

杉山に

田舎に二町歩余りの山林があった。退職後の父は時々中学生の私を杉の植林や下刈りに連れ出し、杉の切り株に座って美味しそうに煙草を吸うのが常であった。そして、周囲の太い杉の一本一本を指さし、「正作の学費になる木だ」と言ってくれた。そんな時のが、後に「山に鈍忘れ来し夜の稲光」という句になった。

杉は美しい。登四郎先生には杉の木を詠んだ句が案外多く、句集『幻山水』には北山杉の連作「杉山にまじりしゆゑの遅紅葉」など七句、次の『有為の山』には、京都神護寺の境内にある句碑に刻まれた「初紅葉せる羞ひを杉間み」が載っている。

両句とも杉と紅葉の組み合わせで興味を引くが、きつと先生は樺の大樹などにみる父性と違って、杉の木には男気というか、男の色気のようなものを感じていたのではなからうかと思う。

鮎落つる九頭竜川の箔つけて
尾根泊り銀河の腹を見てゐたり
タンカーの水脈を豊かに秋の航
あぶれ蚊を打ちて子規庵発ちにけり
芋煮会 会計係すぐ決まる
老兵の屹度 応ふる稲光
銀河濃し芭蕉渡らぬ佐渡島



れるが、この地区の鯨の解禁は六月の下旬である。鯨の解体というリアルな残酷シーンを癒すかのように、和田浦には潮けむりが濃く立ち込めた。

滝行の絞らずに干す白衣かな 小倉 征子

滝行で身を清めるための行衣は、水行の際に身に付ける白衣は何色にも染まらない自分にするということから、修行着として白が用いられるようになったようだ。今までの自分をリセットし、我心を見つめなおすために白の行衣を着用する。滝行が終り丘が上がって、水の滴る行衣をそのまま干している。こんなこだわりを持つのも厳しい修行によるものなのだろうか。

畦刈るや稲はひそかに穂を孕む 佐川三枝子

実りの秋を迎えた田園風景。初夏には青田風にそよいでいた稲たちも、いまやすつしりとした稲穂をつけて、少々の風にはびくともしないほどに生長している。間もなく始まる稲刈に向けて畦に生える草を刈りとった。

花火果つ一湾の空使ひ切り 伊藤よし江

伊藤さんは館山の方なので、詠まれた湾は館山湾。ここは岬に囲まれた大きな入り江となっており、波が穏やかで花火が美しく反射する。また小高い山々に囲まれているのでドーンと鳴った花火の音が反響する。一湾の空を十二分に使い切った花火大会であった。

望郷の明り耀ふ佞武多かな ぐんどうひろこ

佞武多は青森県の代表的な行事。ねぶたは睡魔のことで、睡魔を防ぐ祭とされる。北国の秋の到来を感じさせる祭でもある。夜になり佞武多に鮮やかな明りが灯るとその光景は最高潮に達する。津軽を故郷にする人たちには正に望郷の明りでもあるのだ。

忘れ潮に忘れられたる秋夕焼 木村あさ子

忘れ潮は歳時記によつては晩春の季語「潮干潟」の傍題の一つとして載っているものもある。潮がひいた後、砂浜や岩場に置き去りにされた水溜りのことを言い、覗くと小魚が泳いでいたり、カニやヒトデ、貝などが忘れ潮と一緒に取り残された生き物たちに出会える。しかしこの句、忘れられたのは忘れ潮に映った秋夕焼であったことで詩的な効果を高めた。

鯨割く潮けむり濃き和田の浦 小形 博子

日本の捕鯨問題が国際的にも議論を呼んでいるが、捕鯨は日本の伝統文化に基づくもので、全国にわずか四か所しかない捕鯨基地の一つが千葉県のと田浦にある。鯨は冬の季語に分類さ

能村登四郎の軌跡〔15〕

能村 研三

幟立つ男の国の甲斐に入る

『有為の山』昭51

この句ができた昭和五十一年は、母ひろ子が前年の暮に脳腫瘍の手術をして、入院及び自宅での介護を必要とする療養生活を送っていた時期で、一月には仲の良かった姉が急逝するなど登四郎自身も身心共に極限に達していた。そんな中に「沖」の同人研修会で甲斐の桃源郷を訪ねている。この句は雄々しい立て句であるが、この時期の厳しい状況を克服し自らを奮い立たせる思いもあつたのだろう。甲斐の武将武田信玄を男の国と称えた句である。

梢なる鳥のこころで門火見る

『有為の山』昭51

門火は盂蘭盆で祖先の霊を迎え、送るために門前で焚く火をいう。能村家では昔から東京に菩提寺があるのにもかかわらず、父の考えで旧暦にお盆を行うことにしている。我が家は長い私道の奥にあるため、公道と接する私道の先端まで行つてかわらけの上に芋殻を焚いて門火を行う。お盆は祖先をお迎えするものだが、登四郎にとつては自らの二人の子どもを先に亡くしているので、魂迎にも特別な思いがあつたに違いない。中七の「鳥のこころで」という措辞に思いの深さが感じられる。

初紅葉せる羞ひを杉囲み

『有為の山』昭52

京都の三尾の一つ高雄の神護寺で詠んだ句。神護寺は京都でも有数な紅葉の名所であるが、清瀧川の周辺の山の斜面には北山杉が林立し幾何学模様が広がる。北山杉の美しさは川端康成の小説「古都」や画家の東山魁夷などにより描かれている。初紅葉の頃のほんのりと色づき始めたのを差らいと捉えたのが面白い。「沖」の京都支部の人たちによつて登四郎の第一号句碑として神護寺の「かわらけ投げ」ができる地藏院の近くに昭和五十二年に建立されている。

吾子娶り良夜かすかに老い重り

『有為の山』昭52

母の病気の自宅療養に加えて、父の胃潰瘍により入退院を繰り返すなど、我が家は家庭的にも冬の時代になってしまった。そんな我が家に、両親との同居を快く受け入れてくれた妻の決心は大変ありがたいことであつた。登四郎にとつても家に嫁が来るということは初めての経験で、「面映ゆい思いをしながらも同居家族の生活が始まった。同時期には「萩がもと掃かれてありし嫁が来て」という句なども詠んでいる。



蒼茫集



鶏頭花

宮内とし子

北斎の浪裏

千田 敬

*鶏頭花咲くと云はれぬ昏さあり
反論もなく枝豆の殻の嵩
小はすぐ大に寄り添ふ芋の露
この山に住まふ人あり秋ともし
身を反らし蔓引くことも野路の秋
砂時計の砂の早さや敬老日

ひと鳴きの夏惜しむかにイルカショー
無袋りんご訳ありのこの旨きこと
禿頭はひかり増しをり星月夜
*北斎の浪の裏見し夜の台風
醤油の香佃路地より秋の風
木の实降る雑然とまた整然と

さるすべり

菅谷たけし

雨 後

荒井千佐代

山鳩の声の太さや敗戦忌
さるすべり空を漂ひはじめけり
秋めくや小さき花は小さく咲き
*風に敏感白さるすべりさるすべり
梯子積む車行き交ふ台風過
停電の町の真上に月ひとつ

黒島黒島二句や聖尼の鳴らす鐘澄めり
赤秀樹の気根すさまじ隠れの地
鯨跳ねて川面の出島歪みたる
オランダ坂秋の日傘をひと回し
まつすぐに雨後の日射しや雁来紅
*秋惜しむ軍艦島がらんだうなる島に立ち

秋 高 し

吉田陽代

残暑日々夫に清けき水供ふ
頂きし苦瓜思ひもかけず美味
雨戸立てなほ暴風の底力
*颱風が人間痛めつくしけり
照り翳りはげしき日なり月を待つ
戦知らぬ子の脛長く秋高し

月見の座

千田百里

*流木を焚けば潮突く九月かな
螺旋階のてつぺん銀漢へ続く
かほぢゆうで欠伸する猫夜の長き
黒猫の来て月見の座出来上る
星飛ぶやむかしちやぷちやぷ水枕
生きて来し鎖骨の窪や稲びかり

幸・副主宰

遠 雷

大畑善昭

蝸や一樹が夕日押しとどめ
日暮れむとみんみん蟬の名調子

舗装路に出でて火急の蚯蚓なり
*物足りぬぞよ遠雷の小さきは
山荘の秋の日時計正午差す
晴れ渡りイーハトーヴの稲穂波
団地の窓 七種年男
新松子蒼き風吹く城ヶ島
ノムさんのやうに鬼柚子ぼやきさう
定年や背広より脱皮して秋
城跡に攻め入る如き虫の声
鈴生りや団地の窓の秋灯
*天高し溝に地球を押す力
おはじき 粟原公子
星月夜ジヨバンニの汽車どの辺り
秋立つやガラスの床をそつと踏み
コスモスや無邪気といふは無敵なる
*秋立つや布目ますますに物を干し
骨密度あぐる体操昼の虫
流れ星神のおはじきやも知れず

潮鳴集



邯鄲

大矢恒彦

中華鍋ゆすり残暑の火を吐かす
竹林のぞと雲掃き台風来
存在の首振る秋の扇風機
*邯鄲や森はどこかに夜をもち
遠見には案山子とみえて動き出す

昼ちちろ

大沢美智子

盆北風の押すからつぼの観覧車
今朝処暑の浦曲まぶしき潮煙
レコードは針とのたまふ生身魂
トロットで走らす栗毛鱗雲
*曲屋にもう馬臭なし昼ちちろ

半眼

森村江風

芒原風の手が沿ふ万の筆
*天地の契り激しや稲光
動かざる慈悲の半眼秋思濃し
虫すだく時に濃き闇淡き闇
上州の風まだ柔し穴まどひ

胡弓の音

栗坪和子

涼風や羅漢は享保より眠る
風鈴の短冊風をさがしをり
*晩夏光真水のやうな胡弓の音
杉戸絵にうすくれなるの晩夏光
鬻造る沖を黒潮奔流す

沖作品



能村研三選

百頭の神馬に余る山清水

青森

木村あさ子

曇天にひと刷けの青小鳥来る

朝顔や手の平に乗るほどの風

忘れ潮に忘れられたる秋夕焼

*月昇り初む日本海に影浮かせ

滴りの煙と大地に還りけり

千葉

小形博子

青空に梯梧のほむら愛樂園

水中花耳遠ければほほゑんで

*牛舎へと影の列なす晩夏かな

鯨割く潮けむり濃き和田の浦

政庁の礎石に湿り秋の声

福岡

小倉征子

草の秀を放さず秋の螢かな

声高に流れ藻を焼く夏の果

裏窓や蜘蛛の太鼓の揺れてをり

*滝行の絞らずに干す白衣かな

畦刈るや稲はひそかに穂を孕む

福島

佐川三枝子

大根蒔く雲の尾縮れ初めにけり

盆札や義姉の背中に母を見て

山峡の空押しし拵げ稲雀

*初秋や木橋が跨ぐ谿の音

廃校の庭や色濃き蓼の花

千葉

伊藤よし江

花火果つ一湾の空使ひ切り

とつぷりと浸かる方言浦祭

潮嗅れの氏子の仕切る秋祭

*日本の水のうまさよ小鳥来る

望郷の明り耀ふ佞武多かな

青森

くまのこころ

いわし雲石碑ひとつの出城跡

父の忌に封切る郷の新ばしり

牛小屋を閉めて夜長の刺し子かな

バリカンの起伏不揃ひ休暇果つ